

セルフジャッジ導入の経緯

○審判員の現状における課題

- ・全日本選手権大会では、最低72名の主審が必要
→年々候補者が減っている。
→技量が伴わない審判員を推薦せざる負えない状況
- ・地方協会からの協力状況
第40回：12協会26名
第41回：17協会31名
第42回：14協会28名
- ・審判員の高齢化により、判定ミス多発
- ・主審副審の連携不足
→トラブル多発
- ・明らかな判定ミスにもかかわらず、主審が判定ミスを認めない為
選手がその試合を放棄してしまった例がある。
- ・スコア記入のミス、そのまま本部へ報告し次戦コールされず
不戦敗になった例がある。

○セルフジャッジの現状における課題

- ・練習ではほぼセルフジャッジだが、ルールが不統一
- ・大会でセルフジャッジ方式の導入例がない。
- ・統一したルール作りと試験運用を行い、フェアプレーの浸透とともに問題を洗い出し、
ルールづくりをして行く必要がある。

セルフジャッジの5原則

- ① 判定が難しいときは相手に有利に
- ② 「アウト」「フォルト」はボールとラインの間にはっきりと空間が見えた時
- ③ サーバーは、サービスを打つ前に、相手に聞こえる声でスコアをアナウンスする。
- ④ 判定とコールは、相手に見えるハンドシグナルと相手に聞こえる声で、速やかに。
- ⑤ コート外の人には、セルフジャッジに口出ししない。

今回相模原では、セミセルフジャッジ方式を採用してみる。

- ・スコアシートは付けるがジャッジは行わない。
- ・ジャッジは行わないが、オーバーネット、タッチネットはジャッジする。

セルフジャッジの推進

(フェアプレーの浸透)

- ・選手同士が互いに信頼し合い、フェアなプレーとフェアな判定が行われる。
- ・ルールを守り、公平にプレーする意識が高まり、フェアプレー精神とフェアプレー行動が広まる。
- ・「バウンドテニス選手はフェアプレーをする」という評価が得られる。
- ・「バウンドテニス選手は勝つことよりも大切なことを知っていて、実行できる」という評価が得られる。

(選手の成長)

- ・選手がルールを再確認することで、ルールの理解が深まる。
- ・選手は責任ある行動、公正な態度が求められる。
- ・昨日まで審判にクレームをつけていた選手でも、今日から豊かな心でプレー出来る。